

## 小児用肺炎球菌ワクチン予防接種の効果と副反応について

小児用肺炎球菌ワクチンは、平成25年4月1日から予防接種法に基づく定期の予防接種になりました。このワクチン接種によって肺炎球菌による重い感染症を予防します。必ず本紙をよく読んでから、委託医療機関で接種を受けてください。

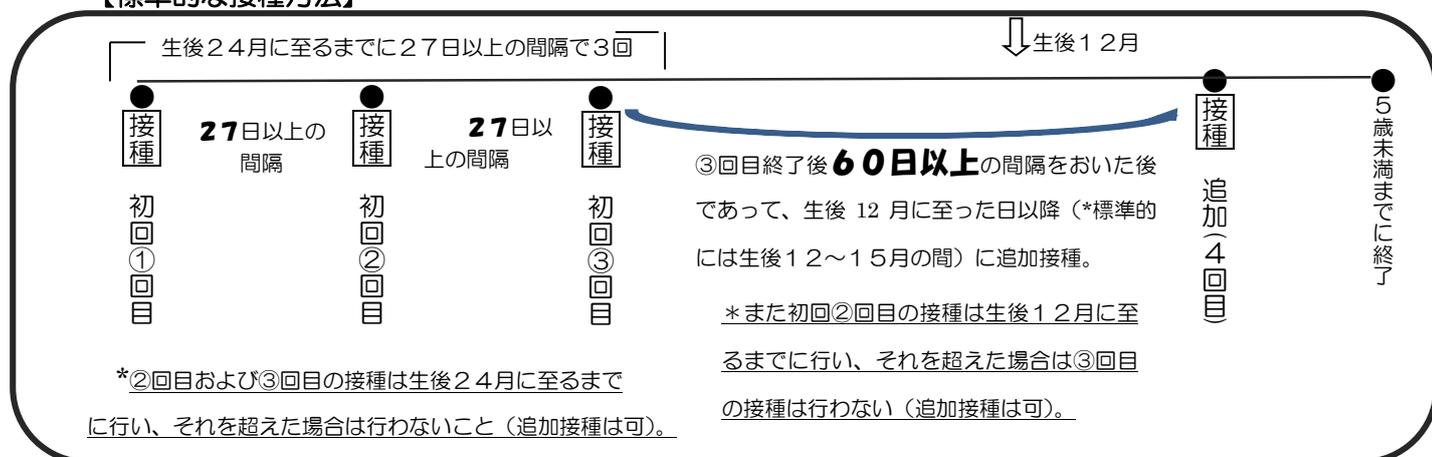
対象者

生後2か月～5歳未満まで

接種回数と間隔

標準的な接種開始時期 生後2～7月の前日までにスタート

### 【標準的な接種方法】



※上記、標準的な接種年令で開始できなかった場合

●生後7月に至った日の翌日～12月に至るまでに接種を開始した場合

→ 初回接種2回と追加接種となり、間隔は上記標準的な接種方法と同じ。

\*（ただし②回目は生後24月に至るまでに行う。それを超えた場合②回目は接種できないが追加接種は可）

●生後12月に至った日の翌日～生後24月（2歳）に至るまでの間に接種を開始した場合

→ 2回を60日以上の間隔で実施。

●生後24月に至った日の翌日～生後60月（5歳）に至るまでの間にスタート

→ 1回で終了

### 病気の概要

- 肺炎球菌は子どもの多くが鼻の奥に保菌していて、子どもの感染症の主な原因菌です。保菌者の全てが発症するわけではなく、抵抗力の低下などにより菌が体内に侵入すると細菌性髄膜炎、菌血症、肺炎、副鼻腔炎、中耳炎といった病気をひきおこします。
- 特に肺炎球菌による細菌性髄膜炎にかかると、治療を受けても約2～5%の乳幼児が死亡し、約15～30%に聴力障害・神経障害などの後遺症を残します。
- 肺炎球菌による細菌性髄膜炎は、2歳未満の乳幼児で特にリスクが高く注意が必要です。

## 副反応

小児用肺炎球菌ワクチンの接種後に他のワクチンでもみられるのと同様の副反応がみられますが、通常は一時的なもので、数日で消失します。最も多くみられるのは、接種部位の発赤や腫脹、硬結です。また全身的な反応として発熱、易刺激性、食欲減退、傾眠状態がみられます。

重い副反応として非常にまれですが、海外で次のような副反応が報告されています。

- (1) ショック、アナフィラキシー様症状（じんましん、呼吸困難など）
- (2) けいれん（熱性けいれん含む）(3) 血小板減少性紫斑病等

## 注 意 点

(1) 予防接種は健康な人が元気な時に接種を受け、その病原体の感染を予防するものです。体調の良い時に受けることが原則です。お子さんの体調をよく理解した保護者がお連れください。

(2) 予防接種を受けることができない人

- ① 明らかに発熱（通常37.5度以上）している人
- ② 重い急性疾患にかかっている人
- ③ このワクチンの成分または破傷風トキソイドによってアナフィラキシー（通常30分以内に出現する呼吸困難や全身性のじんましんなどを伴う重いアレルギー反応のこと）を起こしたことがある方
- ④ その他、かかりつけの医師に予防接種を受けないほうがよいと言われた方

(3) 予防接種を受けるに際し、主治医とよく相談しなくてはならない人

- ① 心臓血管系疾患、腎臓疾患、肝臓疾患、血液疾患、発育障害などの基礎疾患のある方
- ② 過去に予防接種で接種後2日以内に発熱、全身性発疹などのアレルギーを疑う症状のみられた方
- ③ 過去にひきつけ（けいれん）をおこしたことがある方
- ④ 過去に免疫状態の異常を指摘されたことのある方、もしくは近親者に先天性免疫不全症の者がいる方
- ⑤ このワクチンの成分または破傷風トキソイドに対してアレルギーをおこすおそれのある方

(1) 予防接種を受けた後の一般的注意事項

- ① 接種後30分間は、ショックやアナフィラキシーがおこることがありますので、医師とすぐ連絡が取れるようにしておきましょう。
- ② 副反応の多くは1週間以内に出現しますので、この間は体調に十分注意しましょう。
- ③ 接種部位は清潔に保ちましょう。入浴は差し支えありませんが、注射部位を強くこすことはやめましょう。
- ④ 接種当日はいつもどおりの生活をしてかまいませんが、激しい活動は避けましょう。

## 接 種 医 療 機 関

京田辺市内の委託医療機関は、予診票兼受診票（ブルー）の裏面リストをご覧ください。京田辺市以外の医療機関（京都府内委託医療機関）をご希望の場合は、医療機関の確認が必要です。あらかじめ子育て支援課にお申し出ください。

<問い合わせ先>

子育て支援課

0774-64-1377（直通）